

「二歳児の好奇心」を取り戻せ！

「堀川の奇跡」を越えて

荒瀬克己は京都市立堀川高等学校のほとんどの校長で、全国的にも「堀川の奇跡」の立役者として有名な人物である。彼はごく普通の公立高校であった堀川高校を京都市のパイロット校として大幅な改革を行い、国公立大学への進学者を飛躍的に高めたのである。このことはこれまで進学実績においては私立高校に引けを取っていた公立高校にとって大きな意義があり、「堀川の奇跡」と称される偉業を成し遂げたとされる。彼が全国的に有名になったのはNHKで取り上げられたことが大きいが、これも含め神話化された「堀川の奇跡」というフレーズは同時に荒瀬の業績を曇らせることにもつながる。つまり、荒瀬や堀川を語るときに生まれるある種の嫉妬と羨望が彼自身と堀川の実像をゆがめてしまっている。

高校の場合、進学実績を高めるためにはいかにして優秀な中学生を集めるかという点が一定の割合を占めている。専門学科を作るにより学区を越えて優秀な人材を集めること、各地の中学校校長と関係性を築き優秀な中学生に進学を勧めてもらうこと、校舎を一新し中学生にとって魅力ある学校

作りをすること。これらの点が重要になり、これらを意識した「地域の公立パイロット校作り」は顕著になっている。荒瀬の業績において進学実績の向上のみが叫ばれるのは少々、不当なことである。

教師を育てる

彼の校長時代の業績は次の二つの点において後の世代にまで影響を与えている。

一つは人材作りである。「堀川の奇跡」の立役者は荒瀬を中心とした当時の堀川の若手・中堅教師たちである。本書にも登場する飯澤功をはじめとする、全国の探究活動を牽引する若手人材の登用、そして、荒瀬とともに学校改革に取り組み現在、京都市内の公立高校の管理職となっている中堅教師の相互研鑽。とくに現在の京都市内の高校管理職の多くが堀川改革の当事者であったことは注意したい。

かくいう私も堀川改革に参加した二人の校長によって非常勤講師として登用され、現在、学校現場で活動させてもらっている。彼・彼女ら「堀川世代」が従来の学校運営の枠組みにとらわれぬ大胆な手法で公立学校の活性化を行っていることは述べておきたい。これらは学校改革を人材育成の場へと高めた荒瀬のリーダーシップとともに京都市教育委員会のある種のしたたかさを反映したものと理解

— 荒瀬の著作には二〇〇七年出版の『奇跡と呼ばれた学校—国公立大合格者三〇倍のひみつ』朝日新聞社があるが、荒瀬は当初副題の「国公立大合格者三〇倍のひみつ」をメインタイトルに、とオファ—をもらったという。同書八頁。

できる。「一粒で二度おいしい」のである。

「キャリア教育」としての探究活動

荒瀬の業績の根幹をなすものは実は本書の主題である「探究活動」である。従来の進学校の生徒たちには新しい付加価値を持たせた、つまり、アクティブな秀才像、探究を通して煩悶しながらもその中で自身の興味関心を見いだし自分の道を切り開く子ども像を作り出した点である。単に「探究活動」を活性化したのが荒瀬の業績ではない。むしろ、探究をキャリア形成の中核事業へと高め、その先に進学Ⅱ受験勉強を位置づけたことが大きいのである^二。

端的にそれは堀川のカリキュラムに現れている。一、二年において探究を行い自らの興味関心を高め、そこで培ったキャリア意識をもとに三年次の受験勉強へと向かう^三のである。さらに本書に収められている「S W I M」^四の詩に描かれるように探究という泳法は遠泳法と呼ばれるがごとく、受験の後の人生にまで広がっている。

二鳥の研究がしくて前期は北海道大学と、後期は琉球大学を受験した生徒の話に、荒瀬（二〇〇七）は「偏差値で大学を選ぶのではなく、目的で選んでほしい」と添えている（一四〇頁）。

三 荒瀬、二〇〇七、一一三—一二九頁を参照。

四 荒瀬、二〇〇七にも巻末収録。

荒瀬は探究活動をキャリア形成の基本として——それを人生の泳法として考えることで——探究を軸とした「生涯学習」像を描き、その徒然に受験勉強を位置づけ、それまでの「経験」と「知識」という相克する二つの教育理念を統合したということである。そして、この作業に当時の若手中堅教員を巻き込むことで彼・彼女らと一つの「学習」概念を共有し、それをもとに協同する具体的な体験Ⅱ教師教育を堀川で行ったのである。

新しい評価方法を探す

このような理解のもとで荒瀬の講演を読み解いていこう。

彼の講演内容を二つに分けてみる。一つは現在、荒瀬自身が関与している入試改革、もう一つは堀川での体験についてである。

いわゆるセンター試験というものが本当に学力を測っているものかという論争は以前から潜在的にあったものである。たとえば、国語科の入試問題においては、文章を読み解くスキルよりも選択肢と本文を照らし合わせて間違いを探す機械的なスキルの方が確実に問題を解くためには要求されるものになっている。センターが示す読解力と私たちが日常経験する読解力との間に齟齬が生じている。この齟齬は日常における実践的な読解能力を指向するPISAの方針とも合致したものではない。日常

的な違和感とともに国際基準からのプレッシャー、要は当事者意識と外圧が一致する状況において、入試改革は必須な事項になるであろう。

その中で荒瀬の言う「一点刻みの試験を越えていく」とはどのような意味があるのか。この点は私自身いまだ得心がいていない。暫定的に一つの理解として次のように示す。

一点刻みというのは量的な計測である。そこでは学力の伸びを右肩上がり直線グラフとして理解している。それに対して段階的に計測しようというのは学力をいくつかの段階に分ける。学力の伸びは段階的なものとなる。

一つの直線とレベルがいくつもある階段。後者は人間の成長を、諸段階を乗り越えていくプロセス、昆虫のメタモルフォーゼに比喻されるようなものとして理解している。そこでの小さな差異＝一点刻みは余り意味がない。一方の一点刻みのテストはバンク型の成長と理解できる。銀行に貯められたお金は一円でも多い方が良い。ゆえに一点でも高い方がいいのである。

「二歳児の好奇心」

荒瀬が一点刻みのテストに違和感を覚えるのは、彼自身がどのような学力にフォーカスを当てているのかに依っているだろう。この点で講演の後半の内容との連結が行われる。

すなわち、学習意欲とか「二歳児の好奇心」とかで表現されるような「態度」（姿勢あるいは心情）が荒瀬の学力観の一つの根底をなしているということである。「アメリカ大陸を発見したのはコロンブスか」という問いをめぐる教師と子どもたちの交流、京大グラウンドでの金環日食、毒についての興味関心から大きな偉業を成し遂げた子どもの探究活動。これらが示すのは学習の根幹にある、ある種の態度であり、それを擁護する荒瀬は「態度など測定できない」という批判に対して選挙の投票率を用いて反論するのである。

教育観の大きな転換

態度の育成は自律的な学習者像へと接続される。生徒たちが作る学校説明会の描写は一つの実践であるとともに望ましい学習者像の提示でもある。

そこにおいて教師は生徒に必要なおかつクリティカルな要素（事実の峻別）の助言者としての位置を占める。なるほど、知識を独占しそこで生じる情報の非対称性をもとに威厳を保っていた教師像とここでの教師像は異なっているだろう。教師は多くの知識Ⅱ金を有するがゆえに権威性を持つのではなく、学習者とは異なる存在、生きるために重要でクリティカルな事項を持っている、異なる段階にいる権威として理解される。なおかつ、後者においてその権威は学習者を支援するとい

う点で抑圧的な権威者から奉仕する権威へと変容しているのである。

学習を成立させる条件

このような自律的な学習者における「学習」は遊びのない状況、教育プロセスとして充実した状況よりもむしろ、欠損に満ちた状況であると荒瀬はいう。唐突に挿入される宇宙開発の苦勞話が示すことはここでの「学習」は目的に対して最短距離で、なおかつ官僚的管理主義では得られないものであることを示す（彼のいう「適度な貧乏」をそのまま金銭の不足として解してはいけない。なぜなら堀川高校に投資されている予算は他の学校よりも多いものであり、その点である種の矛盾をはらんでいるからである）。

もう一つここには結果からプロセスが見通される視点がある。それは進学実績を高めるためにはどのようなことをしてもよい、ということではない。「結果に結びつきうるプロセス」を私たちが「工夫」と呼ぶように、ここで重要になるのは「工夫」の余地を学習者に与えているかということ、つまり、学習者が試行錯誤できる遊びを用意できているかということである。

だからこそ、荒瀬は学びのチャンスを「分かりにくいもの」、「用意されていない状態」とするのである。分かりにくい、答えがない。だからこそ考え、自分なりの解釈を提示することができる。用意

がされていないから自分で工夫することができる。

「テクニク」ではなく、「あり方」の習得へ

知識詰め込み型教育が教科書の内容を丸暗記すること、テストテクニクを身につけることに集約される。受験産業が果たした大きな功績は合格への最短ルート（受験テクニク）の確立であるとともに、学ぶということの平板化、既製品化だった。この素晴らしく便利なレディメイドを自らに取り込みつつも、そこから抜け出すためにはメタ的な次元で自分自身の学びを構築するしかない。人生というロングスパンにおいて受験を一つの要素として位置づけること、そのために人生という大きな海原を延々と泳ぐすべを身につけること、これが重要になってくる。

探究活動において習得されるものが単なる「研究テクニク」ではないことは理解できるだろう。荒瀬においてそれは「二歳児の好奇心」とされる一つの「態度」や「心情」である。それは勉強や教師に対する態度というよりもむしろ、この世界に存在し、この世界と対峙し続ける「この私自身のあり方」なのである。